

みずほディーラーズアイ (2025年10月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場/ユーロ相場	2	韓国ウォン相場	8
英ポンド相場	5	台湾ドル相場	9
豪ドル相場	6	香港ドル相場	10
カナダドル相場	7	中国人民元相場	11
		シンガポールドル相場	12
		タイバーツ相場	13
		マレーシアリング相場	14
		インドネシアルピア相場	15
		フィリピンペソ相場	16
		インドルピー相場	17

* 見通しは各ディーラーのビューに基づきます。

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

ドル円相場

予想レンジ: USD/JPY 145.00 ~ 150.00

国際為替部 為替営業第二チーム 小林 元子

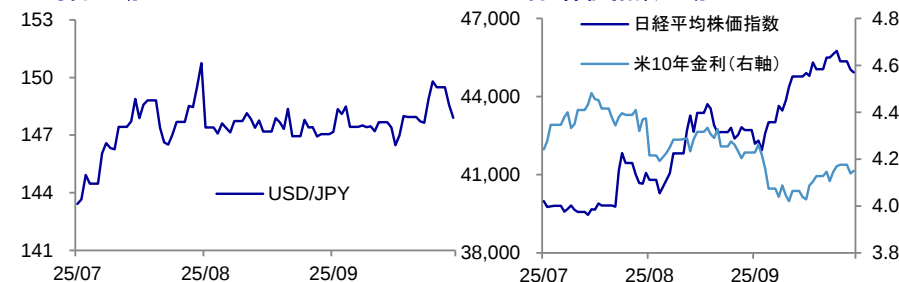
■ 今月の見通し

今月のドル/円相場は、引き続き146～148円のレンジを中心にみ合う展開を想定。米国においては、雇用関連指標の軟調な結果が続いている一方、トランプ大統領による一連の関税政策を背景にインフレが高止まりしている状況が継続。10月開催予定のFOMCにおいて、一部のFRBメンバーが追加利下げに賛成との意見を示しているものの、パウエルFRB議長をはじめ、多くの参加メンバーは、雇用の弱さを認識した上でも、根強く高止まりしているインフレを危惧し、追加利下げには慎重姿勢を示している発言が多くみられた。

一方で、本邦においては、石破氏の首相辞任を発端に政局不安が続いている状況。10月4日(土)に自民党総裁選の投開票が控えているものの、その後も拡張財政路線への警戒が想定され、円買いへの懸念材料払しょくとなるにはまだ時間を要するだろう。また、9月29日に、日銀の野口審議委員が講演にて、「わが国の各種経済指標を確認すると、2%の『物価安定の目標』達成は着実に近づいています」、「政策金利調整の必要性がこれまで以上に高まりつつある」などとタカ派は発言をし、早期の追加利上げに前向きな発言が目立った。これまでハト派とされていた野口委員の発言ということもあり、市場における10月会合の利上げ織り込みは6割強へと上昇。その結果ドル/円は1円程度円高が進行する場面が見られたものの、本邦の実情を考慮すると、新しい政権が発足し、トランプ大統領による一連の関税を受けての影響を確認し、12月もしくは次回の展望レポート回である2026年1月まで現状維持が規定路線ではないかと想定。

10月は日米の政策金利現状維持とのシナリオのもと、9月に続き、ドル/円は146～148円のレンジ推移と想定。一方で、FRBによる追加利下げ、日銀による利上げ等があった場合は、急激な円高進行に留意したい。

■ 為替の動き



■ 金利・株価指数の動き

■ 今月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	前回
9/5	米非農業部門雇用者数変化	9月	51K	22K
9/10	米消費者物価指数(CPI、前年比)	9月	-	2.9%
10/16	米生産者物価指数(PPI、前年比)	9月	-	2.6%
10/16	米小売売上高(前月比)	9月	-	0.6%
10/29	FOMC	-	-	-
10/30	日銀金融政策決定会合	-	-	-

ユーロ相場

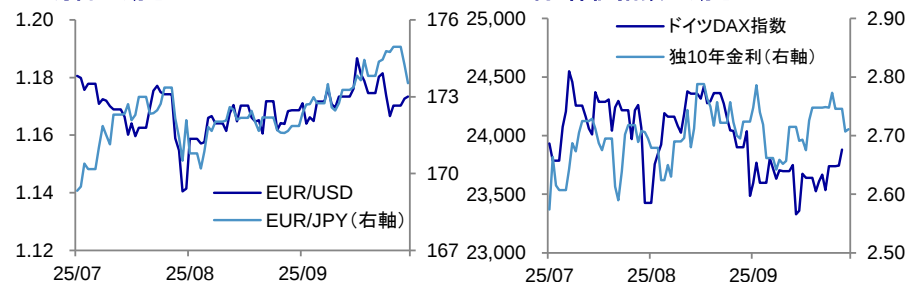
予想レンジ: EUR/USD 1.1650 ~ 1.1900
EUR/JPY 172.50 ~ 175.50

国際為替部 為替営業第二チーム 上遠野 暁洋

■ 今月の見通し

今月のユーロ相場は、再び対ドル1.18台を試す展開を予想。域内インフレ率の根強い再上昇懸念や、米サイドにおけるスタグフレーション懸念および財政不安によるドル売りの流れがユーロのサポートになろう。ECBは9月会合において、インフレ率が中期的に目標2%近辺で安定推移するとの見通しのもと、政策金利の据え置きを決定し、ラガルド総裁も当面利下げ休止の姿勢を示しており、10月会合でも3会合連続での据え置きがメインシナリオ。確かに、関税問題についても米国とひとまずの合意に至り(相互関税一律15%であり、自動車関税も27.5%から15%に引き下げされ8月1日に遡及適用される旨9月下旬に米政府が通知)、不確実性も一部後退したと考えられる中、域内インフレ率(HICP)は前年比+2.0%と目標水準で推移しており、政策金利調整を急がせる根拠に乏しい。ただ、先月26日に発表されたECB調査の8月消費者インフレ期待率(1年先)は+2.8%と前月(+2.6%)から加速しており、ラガルド総裁の言うように「デysinフレーションプロセスは終了」し、今後は再度インフレに備える動きが中心となるならば、足許小幅ながら織り込まれる利下げ期待剥落によるユーロ強含みも予想されるところだろう。もっとも、9月中旬に示現した1.19台を超えての上昇は、ユーロ高からのHICPの押し下げ効果も想起されるため進みづらいつと考える。ユーロの下振れリスクとしては、仏政局不安(内閣総辞職後の2026年度予算決議)、ウクライナ停戦実現可能性の低下(米国がウクライナへの長距離武器供与等の支援姿勢)、賃金の予想外の低下(17日に発表されたECB賃金トラッカーでは、2026年上半期の賃金の伸び率を+1.7%と予測し、今年下半期予想の+2.1%から鈍化する見込み)等のヘッドラインが挙げられる。なお、ユーロ/円については、月初の日銀短観や植田総裁発言や米国指標を受けたドル/円の一時的に円高に振れる場面はあるかもしれないが、ドルからの逃避先としてのユーロの位置付けもあり底堅い推移を想定。

■ 為替の動き



■ 金利・株価指数の動き

■ 今月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	前回
10/1	ユーロ圏消費者物価指数(HICP、速報、前年比)	9月	2.2%	2.0%
10/6	ユーロ圏小売売上高(前月比)	8月	-	-0.5%
10/14	独ZEW景気期待指数	10月	-	37.3
10/24	ユーロ圏PMI(製造業/非製造業、速報)	10月	-	-
10/27	独IFO企業景況感指数	10月	-	87.7
10/30	ECB主要政策金利	-	2.15%	2.15%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル/円 見通しまとめ

ブル	5名	150.00 ～ 146.00	ベア	11名	150.00 ～ 145.00
----	----	-----------------------	----	-----	-----------------------

※ レンジは中心値

関	ブル	151.00 ～ 147.00	米政府閉鎖・統計遅延は下押し圧力だが、短期収束で影響は軽微。総裁選は誰が勝っても、成長期待と緩和継続観測から円安材料となり150円再トライを見込むが、FEDの追加利下げ期待が上値を抑え、8月の高値突破は難しい展開か。
山崎	ベア	150.50 ～ 144.40	ドル円は下方向を予想。政府閉鎖から雇用統計が発表できないところから、ドル安の流れか。レンジ相場の下では底堅く推移すると予想。BOJで政策金利引き上げから下方向へ警戒。
永野	ブル	151.00 ～ 146.00	FOMCは9月に市場予想通り▲25bpの利下げを実施したものの、予防的な利下げの意味合いが強く、足許の米インフレや米経済指標の底堅さからドル円は堅調に推移すると予想。日銀の利上げがあっても下げは限定的か。
加藤	ベア	150.00 ～ 144.00	米国利下げを背景にドルが広範の通貨に対して売られているが対円ではそれほどドル売りが進んでいない状況下で早ければ10月、遅くとも1月には本邦での利上げが想定される。よって150円台は重い。
鳥場	ベア	151.00 ～ 144.00	市場テーマは、米国の利下げスピードと回数。年内2回のコンセンサスの中で、雇用及びインフレ指標を確認しながらの相場。パウエルFRB議長による市場との対話を鑑みると過度な利下げ期待も禁物と思料。
山口	ベア	150.00 ～ 145.00	ドル円は自民党総裁選の結果次第で一時的に150円台をつける可能性があるも、10月の日本銀行の利下げ観測の高まりから、円高に戻す展開を予想する。
山口(朋)	ベア	151.00 ～ 146.00	日銀による早期利上げ、Fedの追加利下げが議論される局面では一時的にドル円は上値重く推移するも、それぞれのイベント通過後には再びドル買いに転じると予想。
松永	ブル	149.50 ～ 146.90	10月利下げへの見方が分かれる中、経済指標の結果に一喜一憂する展開が継続しそう。インフレリスクもぬぐえない中、ドルの底堅さは継続しよう。
上遠野	ベア	150.00 ～ 144.00	日米ともに目先の金融政策への思惑が二分する中でボラティリティの上昇がドル円の上値を抑えるだろう。雇用・インフレ指標や当局者コメントでの上下動はあるが、月末に並んだ中銀イベントを見据え警戒感は拭えずとみる。
小林	ベア	150.00 ～ 145.00	10月末に開催予定の日米の金融決定会合では、ともに政策金利据え置きを想定するも、米国における雇用の弱さが目立っており、追加利下げが持ち上がっている状況下では一段と積極的なドル買いは想定しづらく、軟調推移となるか。
大熊	ベア	150.00 ～ 145.00	FRBの積極的な利下げ観測を後退させるような強い米指標が確認されれば、安心感により日銀の利上げ織り込みは加速すると思われる。一方で、円キャリートレードの動きもある為、下げたとしても下値は限定的か。
伊藤	ベア	150.00 ～ 144.50	年内の日銀利上げが現実味を帯びてきた中で、BOJをカタリストにして円高に振れる局面は出てくるであろうが、連続的な利上げのハードルは高いだけに、10月会合後の戻り売りには注意したい。
鈴木	ブル	151.00 ～ 145.00	米政府機関の閉鎖、自民党総裁選の行方次第で値幅を伴いながらも、日銀の10月利上げが相応に織り込まれている状況下、円買い余力は限定的。底堅い推移になることを予想する。
西	ブル	150.00 ～ 145.00	関税の影響がただちに払拭されるわけではないため、足許の日銀タカ派化期待が巻き戻される可能性に注意が必要。また、本邦政局動向も不透明だが、結局は財政拡張路線が見込まれるため、継続的な円買いは難しいのではないかと。
原田	ベア	150.00 ～ 145.00	FRBが利下げを再開するなどドル売り材料が増えているが、今後の利下げサイクルは不透明な面が多く米経済指標の動向次第であろう。他方で自民党総裁選の結果に応じては円売りが進む可能性もある。
松木	ベア	150.00 ～ 146.00	日銀短観や日銀支店長会議を経て、企業に与える関税影響や賃金動向が明らかになると判断がなされる場合には10月会合での利上げを織り込む動きに円高に振れる展開もあろう。

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ/ドル 見通しまとめ 見通しまとめ

ブル	14名	1.1900 ～ 1.1600	ベア	2名	1.1850 ～ 1.1475
----	-----	-----------------------	----	----	-----------------------

※ レンジは中心値

関	ブル	1.1900 ～ 1.1650	米政府閉鎖懸念は早期収束観測で持続性は乏しいものの、序盤はドル軟調でユーロ支援の材料か。FOMCでの利下げと追加緩和観測は、ユーロを下支えするものの、ECBが慎重姿勢を継続する事で上昇は緩やかなものに留まるものと見込む。	上遠野	ブル	1.1900 ～ 1.1650	域内インフレ率の根強い再上昇懸念や、米国サイドにおけるスタグフレーション懸念および財政不安によるドル売りの流れがユーロ相場のサポートとなり、再び対ドル1.18台を試す展開を予想。
山崎	ブル	1.2000 ～ 1.1600	ユーロは上方向に警戒したい。ドル安からのユーロ高か。ただ、2025年は上昇一方向であり、上値余地はあまりなく、値動きh限定的か。	小林	ブル	1.1900 ～ 1.1500	欧州圏の経済指標は底堅さが示されており、政策金利維持との見通しが基本路線となっている一方、米国においては雇用の弱さが目立ち追加利下げが盛り上がっている中、ユーロは対ドルで堅調推移となろう。
永野	ブル	1.1900 ～ 1.1500	金融政策の違いや米ドル離れの受け皿としてのユーロ買いと、フランス債務問題や堅調な米インフレ等によるユーロ売り・ドル買いが交錯してレンジ内の推移を予想する。	大熊	ブル	1.2000 ～ 1.1600	ECBの利下げ局面は既に終了し、回数は最大であと1回という見方が織り込まれている。米政府機関の閉鎖の可能性など、ドルの信認が揺らぐ要因が事欠かない中、ユーロは底堅さを維持すると思われる。
加藤	ブル	1.1900 ～ 1.1650	FRBによる利上げに関して限界論が浮上してきているものの、ユーロ相場が構造的に大崩れしない局面に入ってきてる可能性は否定できず、今しばらくユーロの堅調さは維持されよう。	伊藤	ベア	1.1900 ～ 1.1500	ウクライナ情勢に対する先行きが再び怪しくなっていることがユーロに強い向かい風を今後もたらす可能性が高そうだ。加えて、Fedの利下げも結局は緩やかに進む雰囲気もある。その結果、大きな方向としてはユーロ安で見ておきたい。
鳥場	ブル	1.2000 ～ 1.1500	引き続き、欧州金融政策はニュートラル。当局者発言から鑑みても様子見ムードで、次の一手を決めるための判断材料待ち。ドル軟調地合いの中で相対的に押し出されやすいユーロの構図は不変。	鈴木	ブル	1.1950 ～ 1.1600	米政府機関の閉鎖やトランプ政権による利下げ圧力など、ドル売りを想起させる材料には事欠かない。地政学リスクは燦るものの、上述材料をサポートに、ユーロは底堅い推移になることを予想する。
山口	ブル	1.2000 ～ 1.1600	米国は利下げ方向、欧州は利下げ終了との見方から、米独金利差が縮小して、ユーロ高に進む展開を予想する。	西	ブル	1.2000 ～ 1.1600	利下げ再開のFRB、利下げ停止だけでなく利上げ再開も展望するECBということで、両者の金融政策の違いは明確。また、FRBの独立性も話題になる中でグローバルなユーロシフトもサポート材料となり、底堅い推移が想定される。
山口(朋)	ブル	1.1900 ～ 1.1500	欧州経済は底堅く、物価は目標近辺で落ち着いた推移となっており、当面政策金利は据え置き継続を予想。米利下げは本格化する局面では再びユーロ買い優勢となろう。	原田	ブル	1.1800 ～ 1.1600	ECBが利下げ停止局面にあり、当面は政策金利が据え置かれるだろう。一方でFRBが利下げを再開したため、金融政策の違いからドル売りの受け皿としてのユーロ買いが進みやすいだろう。
松永	ベア	1.1800 ～ 1.1450	第1四半期に見られた輸出増の反動減には引き続き警戒も、金融政策の方向性の違いや、欧州の軍事支出拡大などの材料が引き続きユーロを下支えしていこう。	松木	ブル	1.1900 ～ 1.1600	FRBの利下げを巡り市場の見方はハト派寄りの為、米国経済の底堅さが示された場合にはドルが買い戻されよう。一方、ユーロ圏の景況感やインフレデータを見ても、ユーロ売りに傾くとは想定しておらずレンジでの推移を見込む。

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.3100 ~ 1.3600
GBP/JPY 194.00 ~ 204.00

欧州資金部 天沼 幹

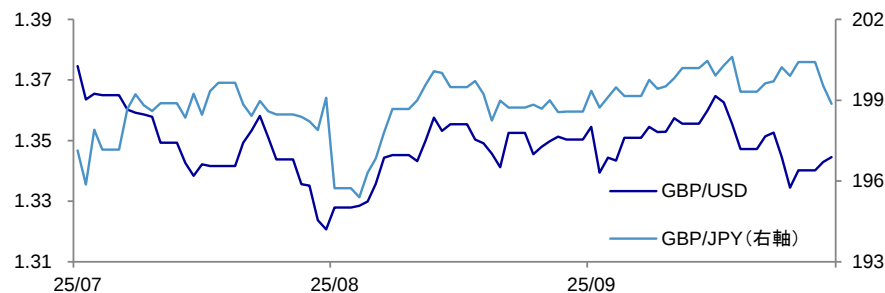
■ 先月の為替相場

先月の英ポンドは、月半ばに上値を追うも、全体で見ると対ドルで下落した。月初2日、英30年債利回りが1998年以来の高水準となり、ポンドが大きく売られた。背景には財政問題と構造変化による世界的な長期債需要の減少がある。3日、英金利の動きが一服したことでポンドも反発し、5日には米8月雇用統計の結果を受けてポンドが続伸した。週明け8日、米雇用統計を受けた調整の継続か、米金利低下に伴ったドル売りでポンドも底堅く推移。11日、ECB政策金利発表を控えて対ユーロで売られる。その後、米新規失業保険申請件数が市場予想を上回り、ドル売りに伴ったポンド上昇に転じた。15日と16日は米FOMCを控えたドル売りでポンド続伸。17日、英8月消費者物価指数(CPI)がサービスで予想を下回るも市場への影響は限定的となった。午後のFOMCは市場予想通り▲25bpの利下げで、初動ドル安で動くもすぐに切り返し、ドル売りのショートカバーでドル高推移。18日は、BOE政策金利発表にて市場予想通り据え置きとなった。その後発表された米新規失業保険申請件数が減少となりドル高でポンド急落。19日、FOMCを受けて材料難となりショートカバーが続いたか、全体的なドル高でポンド売りが進んだ。最終週は各種米指標が強含み全面的なドル高で推移した。

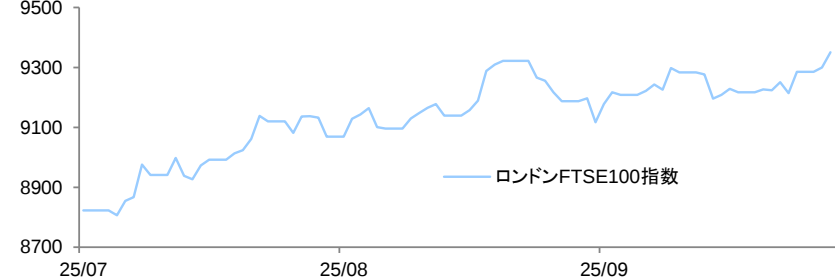
■ 今月の見通し

今月の英ポンドは軟調推移を想定する。オプション市場を見ると、英国の秋の予算に対するトレーダーの懸念が高まっていることが示唆されており、11月がポンド安の焦点として浮上している。ブルームバーグがまとめたデータによると、11月に満期を迎えるユーロポンドオプションの約80%はポンド下落に傾いている。その流れを受けて10月中も上値重いバイアスがかかるように思う。また直近のPMIでは、7~9月期末に経済の勢いが失われたことを示唆していた。これは世界的な需要の弱まりを反映している部分もあるが、次期予算に関する懸念とも関連しているように思う。市場では英政府が増税を余儀なくされる可能性が意識されている一方、BOEが再び金利を引き下げるためにはデフレーションの確かなデータが必要になるだろう。注目の英経済指標としては14日(火)の英8月雇用統計、22日(水)の英9月CPIがある。現状のところ雇用が悪化する中でインフレは高止まりしており、スタグフレーション的な内容。雇用と成長見通しが改善することで短期的にポンドが買い戻される展開は考えられるが、目先は予算案がより意識されるように思う。

■ 為替の動き



■ 株価指数の動き



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/16	雇用統計(失業率)	7月	4.7%	4.7%	4.7%
9/17	CPI	8月	3.8%	3.8%	3.8%
9/18	英中銀政策金利		4.00%	4.00%	4.00%

■ 今月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想
10/14	雇用統計(失業率)	8月	-
10/22	CPI	9月	-
10/24	製造業/非製造業PMI(速報)	10月	-

豪ドル相場

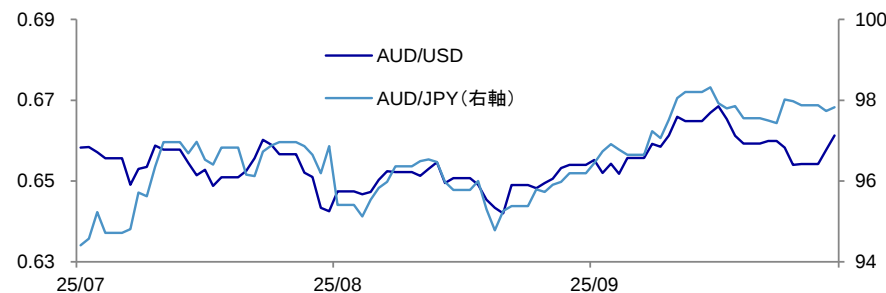
予想レンジ: AUD/USD 0.6480 ~ 0.6690
AUD/JPY 95.00 ~ 100.00

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 安藤 愛

■ 先月の為替相場

先月の豪ドルは中旬にかけて上昇後、月末にかけて低下。初旬、2日、ロンドン時間に英国債利回りが急上昇したことを受けてポンド安・米ドル高となった流れから、豪ドルは一時月安値の0.6483まで下落。3日、豪6～9月GDPが予想対比上振れたことで9月RBAにおける金利据え置き期待が高まったが、為替の反応は限定的。米7月JOLT求人件数が予想を下回るとドル安となり0.65半ばまで上昇。5日、米8月雇用統計が予想を下振れ米ドルが売られ一時0.6588まで上昇。中旬、10日、米8月PPIが前月比で下落したことで、インフレ再燃の懸念が和らぎ7カ月ぶり高値を更新し0.66台前半まで上昇。11日、米8月CPIは大きなサプライズはなかった一方で、同時に発表された米新規失業保険申請件数がほぼ4年ぶりの高水準となり、労働市場における需給の緩みが強く意識された。米ドルが幅広い通貨に対して売られ、豪ドルが買われる展開となり0.66台半ばまで上昇。その後、FOMCまで米金利低下の流れが続き0.66台後半までじり高の展開。17日、FOMCでは政策金利の25bp利下げが決定され、同時に発表されたドットチャートでは年内2回の追加利下げを示唆。この発表を受けて瞬間的に月高値0.6707まで上昇した後、すぐに売り戻され往って来いの展開に。その後の記者会見でパウエル議長が今回の決定について「リスク管理の利下げ」と表現すると、米ドルは上昇に転じ、0.66台半ばまで下落。下旬、24日、豪8月CPIが予想を上振れたことで買いが優勢となったが、すぐに失速。25日、米4～6月期GDPが2年振りの高い伸びとなったことを受けて米ドル買いが優勢となる中、大きく売られて0.65台前半まで下落。月末にかけて方向感なく0.65台半ばで推移。

■ 為替の動き



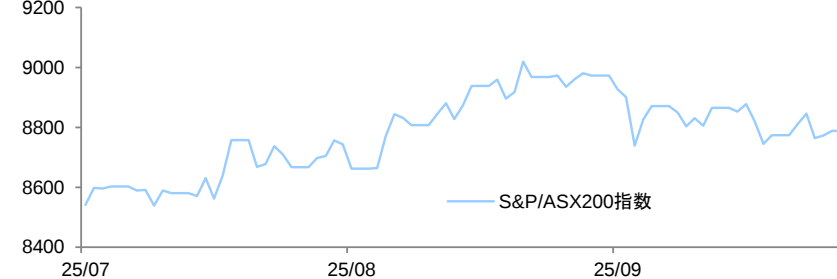
■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/3	GDP(前期比、季調済)	2Q	0.50%	0.60%	0.20%
9/3	GDP(前年比、季調済)	2Q	1.60%	1.80%	1.30%
9/4	貿易収支 (A\$ m)	7月	4,900	7,310	5,365
9/18	失業率(季調済)	8月	4.20%	4.20%	4.24%
9/18	雇用者数変化	8月	21.0	-5.4	24.5
9/24	月次CPI(前年比)	8月	2.85%	3.00%	2.80%
9/30	豪州準備銀行理事会		3.60%	3.60%	3.60%

■ 今月の見通し

10月の豪ドルは底堅いと予想。豪8月CPIが上振れたことをきっかけに、RBA利下げ織り込みが剥落。10月下旬に公表予定の豪7～9月期CPIの上振れリスクが懸念される中、年内の利下げ織り込みは本稿執筆時点で18bp程度と、1回弱の織り込みとなっている。一方、労働市場の減速懸念からFEDの追加緩和観測が強まっており、米国サイドの利下げ織り込みは年内2回弱。利下げ織り込みの差を背景に、豪ドルが買われやすい地合いと見る。雇用者数が予想外に減少に転じた豪8月雇用統計を受けて労働市場の緩やかな減速が意識されているが、9月の豪雇用統計が想定内であった場合、RBAが早期利下げに向けた積極的なコミュニケーションを行う蓋然性は低いだろう。一方、米国では2日に9月雇用統計の発表を控えており、更なる労働市場の減速が確認された場合、年内2回の利下げをフルに織り込みにくい展開が予想される。米雇用統計並びに豪7～9月期CPIの結果に注目したい。

■ 株価指数の動き



■ 今月の注目イベント

発表日	豪州準備銀行理事会	期間	予想
10/2	貿易収支 (A\$ m)	8月	6,200
10/16	失業率(季調済)	9月	-
10/16	雇用者数変化	9月	-
10/29	消費者物価指数(前期比)	3Q	-
10/29	消費者物価指数(前年比)	3Q	-
10/29	月次CPI(前年比)	2Q	-
10/29	月次CPIトリム平均値(前年比)	9月	-

カナダドル相場

予想レンジ: USD/CAD 1.3600 ~ 1.4000
CAD/JPY 105.00 ~ 108.00

米州マーケット部カナダ室 岩田 保子

■ 先月の為替相場

先月のUSD/CADは、カナダ中銀とFRBによる利下げの可否を巡る市場の動きに左右され、1.37台半ばから1.38台後半で推移。下旬は市場での米利下げ回数予想の低下に伴い、USD買いが優勢となり、USD/CADは5週間ぶりに1.39台へと上昇した。

月初5日には米加両国の8月雇用統計が発表され、カナダでは雇用者数は約6.6万人減と2カ月連続で減少。データ発表直後は軟調な米雇用統計に反応して、USD/CADは1.3790台から1.3760まで急落したが、その後はCAD売り優勢となり、USD/CADは1.3854まで上昇。

中旬は、米国の8月CPIが概ね予想と一致。FRBによる9月利下げはほぼ確定し、注目は大幅利下げ(0.50%)か否かという点に移った。9/16発表のカナダの8月CPIは前年比で1.9%と前月から加速。ただし、ガソリンを除けば前月比2.4%で過去3カ月の2.5%から低下。米国同様、翌日に控えたカナダ中銀会合での利下げも確実視された。9/17の会合では予想通り、カナダ中銀は4会合ぶりに0.25%の利下げを決定し、翌日物政策金利は2.75%から2.50%へと引き下げられた。また同日午後のFOMCでも、FRBは6会合ぶりに利下げを決定した。

下旬は、パウエル議長を始めFRB高官の中で10月利下げに慎重な姿勢が示されたこと、また第2四半期GDPや個人消費など米経済指標が堅調であったことから、市場における年内の米国利下げ回数予想が低下。USD/CADは5月以来となる最高値1.3959(9/26)をつけた後、9/29現在も1.39台で推移している。

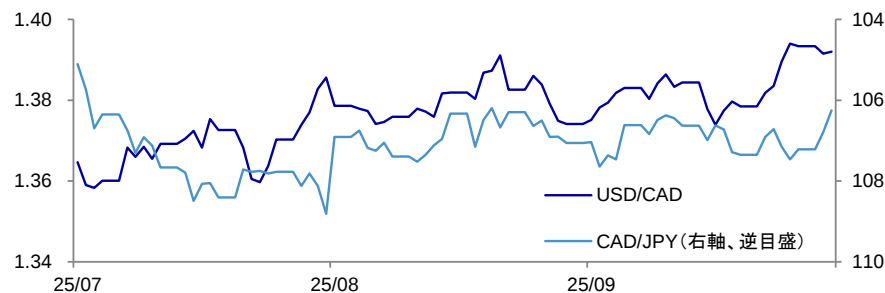
■ 今月の見通し

カナダ中銀のマックレム総裁は9月会合時の記者会見でインフレについて、特に米国からの輸入品に対するほとんどの報復関税を連邦政府が9/1付けで撤廃したこと、今後の価格上昇圧力が低下する可能性があるとのやや楽観的な見方を示した。しかし一方で、利下げの必要性に関する文言を声明文から削除したものの、マックレム総裁は、依然として続く関税政策の不透明感から、経済状態がさらに悪化した場合には追加利下げを実施する可能性があることを示唆した。とはいえ、カナダ中銀は中立金利を2.25%~3.25%としており、現在政策金利がすでに2.50%であることを考えると、利下げはあと1回と想定される。一方、米国では労働市場がさらに悪化した場合には、まだ複数回の利下げの可能性もある。

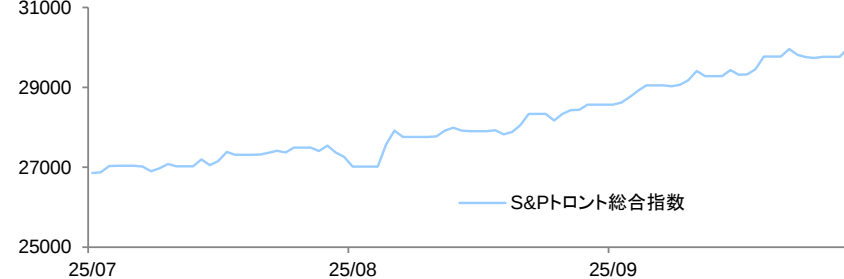
今月は、市場における米国での10月利下げ確率が89%まで上昇していることから(9/29現在)、雇用統計とCPIの結果が上振れした場合、USD/CADでは4月以来となる1.40をつけるか否かが注目される(逆に、雇用統計が予想を下回った場合にはUSD売り優勢と予想)。

しかし年末に向けては、前述のようにカナダの利下げが最終局面にあることから米加間の金利差が縮小していくこと、また米関税政策の焦点が来年のUSMCA(米国・メキシコ・カナダ協定)の見直しへと移り、カナダ経済への米関税政策による影響は短期的には安定してきたとの見方をカナダ中銀が示していることから、USD/CADは現在の1.39台から徐々に低下、第2四半期の大半と同様に1.36~1.38のレンジで推移し、1.37のレベルで越年すると予想する。

■ 為替の動き



■ 株価指数の動き



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/2	S&Pグローバル・カナダ製造業PMI	8月	-	48.3	46.1
9/5	ネット雇用変化	8月	5.0k	-65.5k	-40.8k
9/5	失業率	8月	7.0%	7.1%	6.9%
9/16	CPI (前年比)	8月	2.0%	1.9%	1.7%
9/17	カナダ中銀金融政策決定会合		2.50%	2.50%	2.75%
9/26	GDP(前月比)	7月	0.1%	0.2%	-0.1%

■ 今月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想
10/1	S&Pグローバル・カナダ製造業PMI	9月	-
10/10	ネット雇用変化	8月	-
10/10	失業率	8月	-
10/21	CPI (前年比)	8月	-
10/29	カナダ中銀金融政策決定会合		-
10/31	GDP(前月比)	8月	-

韓国ウォン相場

予想レンジ: USD/KRW 1370 ~ 1420
KRW/JPY 10.31 ~ 11.05 (注) 100韓国ウォンあたりの対円レート

東アジア資金部ソウル資金室 山内 脩平

■ 先月の為替相場

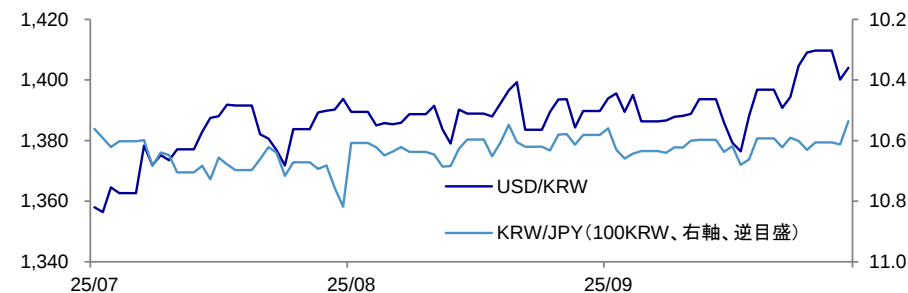
9月のドル/ウォンは上昇。

月初ドルウォンは1390.0でオープン。韓国8月輸出額、8月CPIが予想を下振れるも、為替相場への影響は限定的で、米雇用統計を見極めたいとの思惑から、9月初週は1,390前後での揉み合い推移が続いた。米雇用統計が弱含み、利下げ織り込みが進むも、日本で石破首相が辞意を表明し円安が進行したことを受けて、ウォンも弱含む場面が見られた。その後李大統領が就任100日にあたり、株式譲渡課税に係る基準引き下げ案の撤回意向を示すと、KOSPIは2021年6月以来の市場最高値を更新する動きとなった。それに合わせて外国人投資家らの資金流入も観測され、一時1,385付近まで下落した。

月末にかけても株式市場への資金流入は堅調で、米利下げ期待が高まっていることも材料にウォン高推移が継続。一時1,377.3まで下落した。FOMCでは大方の予想通り利下げが決定されるも、今後の利下げ幅について従来想定比限定的になるとの見方が広がり、その後ドル買戻しの動きが見られ、FOMC後に1,390を回復する動きとなった。

月末にかけては良好な米経済指標を受けて米金利が上昇。1,400の節目付近では当局介入への警戒が強まるも、韓米貿易交渉において、トランプ大統領から韓国の3,500億ドルの対米投資は「先払い」といった発言が見られると、ウォンの需給悪化を懸念して一段とウォン安が進行。月末にかけて一時1,414.0の高値をつける動きとなった。

■ 為替の動き



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/1	貿易収支	8月	\$5698M	\$6514M	\$6610M
9/1	輸出(前年比)	8月	2.3%	1.3%	5.9%
9/1	輸入(前年比)	8月	-2.5%	-4.0%	0.7%
9/2	CPI(前年比)	8月	1.9%	1.7%	2.1%
9/3	GDP(速報, 前年同期比)	2Q	0.6%	0.7%	0.6%
9/24	消費者心理指数	8月	-	110.1	111.4

■ 今月の見通し

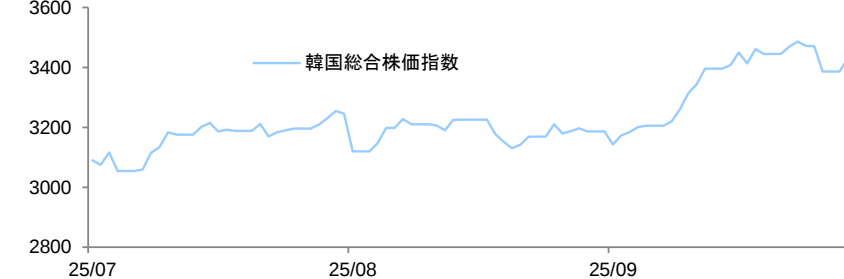
10月のドル/ウォンは揉み合い推移を予想。

9月末に具副首相は米国との為替交渉が終了したと発表。詳細については近く発表するとされており、現時点では不詳ながらも、韓国の為替市場特有の事情や通貨スワップ協定の必要性について共有したとされる。韓米貿易交渉を巡る不透明感が足許ウォン安要因の一つとなっており、動向には注意したい。

23日にはBOK会合が予定される。首都圏の住宅価格や家計債務の動向をしばらく注視する必要があるとしており、インフレは概ねターゲット内に収まるも、引き続き慎重な政策運営が継続し、利下げ見送り可能性が高い状況か。

ドル/ウォン相場は引き続きドル動向に左右される展開が予想されるも、米利下げ幅が限定的なものになるとの見方や、上記韓米貿易交渉で合意した対米投資を通じたウォン需給の悪化懸念がウォン相場には重しとり、下値は限定的な推移が継続しよう。

■ 株価指数の動き



■ 今月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想
10/1	貿易収支	9月	\$7930M
10/1	輸出(前年比)	9月	8.2%
10/1	輸入(前年比)	9月	6.7%
10/2	CPI(前年比)	9月	2.1%
10/23	BOK政策金利	10月	2.50%
10/28	消費者心理指数	9月	-

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 28.90 ~ 31.40
TWD/JPY 4.6 ~ 5.2

東アジア資金部台北室 ヤン チェンロン

■ 先月の為替相場

9月のドル/台湾ドルは往って来いの展開となった。

月初の9月1日は30.580でオープン後、先月のドル高の流れを受け、一時30.75価格近辺まで上昇したものの、8月の米雇用統計が7月に続いて弱い内容となり、FRBによる利下げ再開の可能性が高まった。こうした米国の景気減速懸念と金融緩和期待を背景に、台湾ドルがじわりと上昇し、30価格台前半まで値を戻した。

月央になると、台湾が発表された8月の輸出伸び率は市場予想を大きく上回り、AI関連ハイテク製品の高成長が続いていることが再確認され、台湾経済の先行きに対する安心感が台湾ドルの買い材料となった一方、9月のFOMCでFRBは25bpの利下げを実施し、予想通り利下げ局面に再突入。また、台湾中銀は金融政策を据え置いたことで、為替相場への影響は限定的に留まった。

月後半に入ると、米経済指標の強さが際立ち、景気の底堅さが確認されたことで、FRBの追加利下げ観測が小幅ながら後退。米金利の上昇とともに、ドル買いが加速し、台湾ドルは対ドルで再び30価格半ば近辺売られ、同レベルでクローズ。

■ 今月の見通し

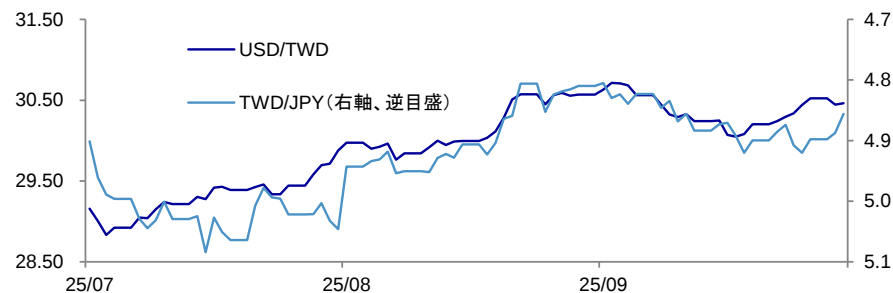
10月のドル/台湾ドルはレンジ相場を予想。

10月の台湾ドル相場は、米金利の推移を睨みながら、上下する展開。米国ではGDPや雇用指標が予想を上回り、FRBの追加利下げ観測がやや後退。これを受けてドルは全面高となり、台湾ドルは対ドルでやや弱含みで月初を迎える見込み。

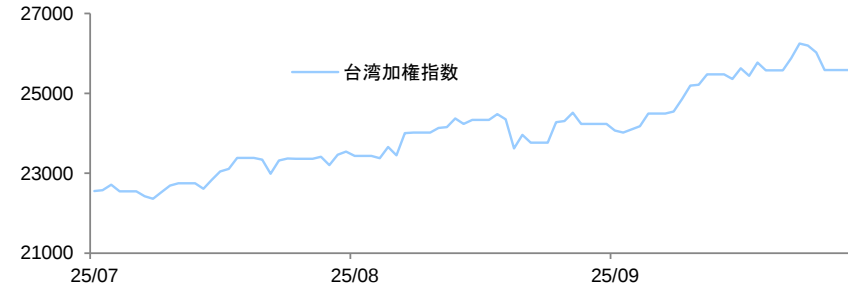
一方、台湾ではAI関連を中心としたハイテク輸出が高成長を維持し、企業の設備投資も活発。新型スマートフォンの発売や最先端GPUの出荷継続など、外需を支える要因が複数あり、台湾経済のファンダメンタルズは良好。米国の半導体関税は懸念されるものの、台湾企業の対米投資が進んでいるため、影響は限定的と見られる。

しかし、年末にかけて、米景気減速に対する警戒感は根強く、米金利低下に伴うドル売りが再び強まる可能性もあるが、台湾景気にもネガティブな影響を与えれば、台湾ドルの上値も重たくなるだろう。

■ 為替の動き



■ 株価指数の動き



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/1	製造業PMI指数	8月	-	47.4	46.2
9/5	CPI(前年比)	8月	1.60%	1.60%	1.53%
9/9	輸出(前年比)	8月	25.0%	34.1%	42.0%
9/18	台湾中銀金融政策決定会合	-	2.00%	2.00%	2.00%
9/23	輸出受注(前年比)	8月	12.80%	19.50%	20.80%
9/24	鉱工業生産(前年比)	8月	14.85%	14.41%	18.11%

■ 今月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想
10/1	製造業PMI指数	9月	-
10/8	CPI(前年比)	9月	-
10/9	輸出(前年比)	9月	-
10/21	輸出受注(前年比)	9月	-
10/23	鉱工業生産(前年比)	9月	-
10/24	失業率	9月	-

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.7500 ~ 7.8000
HKD/JPY 18.40 ~ 19.40

東アジア資金部 香港室 久本 和樹

■ 先月の為替相場

9月の米ドル/香港ドル相場は下落した。6月以降断続的に行われていた香港金融管理局(HKMA)によるUSD売りHKD買い介入の影響で市中の香港ドル流動性、アグリゲートバランスが減少し低位で推移する中、香港ドル金利に上昇圧力がかかりHIBOR 3Mが一時3%台後半まで上昇する展開に。一方で、9月初に発表された米8月雇用統計は前回同様軟調な結果となったことや、9月半ばに実施されたFOMC会合においては25BPの利下げが決定されたことなどを背景に米金利には低下圧力がかかり続ける展開になった。こうした動きに伴い米ドルと香港ドルの金利差が急速に縮小していったことを背景に、ドル売り香港ドル買い圧力が強まり7.77近辺まで下落する展開となった。

また、香港株式市場の堅調な値動きも材料の一つとなっている。こうした動きから海外投資家からの資金流入も期待される他、2022年以来減速していたIPO市場での資金需要等にも復活の兆しが見られはじめており、香港ドルの支えとなる可能性がある。経済指標に目を向けると、香港7月小売売上高は1.0%と市場予想対比弱いながらもプラス圏を維持していた他、香港6月輸出(前年比)、香港6月輸入(前年比)に関してもプラス圏を維持。米国による相互関税導入を巡り香港経済の下振れ懸念は熾るものの、実体経済、指標には過度な影響はまだ出ていないことが読み取れる。

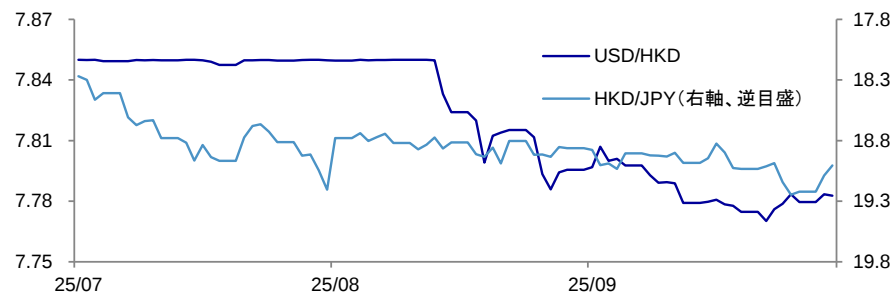
■ 今月の見通し

10月の米ドル/香港ドル相場は、ペッグ制レンジの下半分である7.75~7.80での推移が想定される。9月については発表された米経済指標が軟調な結果となった他、9月のFOMCにおいて2025年内の追加利下げ見通しが2回と発表されたことなどを受けて米金利に低下圧力がかかる展開となった。雇用市場の減速を受けて米利下げスタンスが鮮明となる中、米金利には低下圧力がかかりやすく、グローバルに米ドルを下押しすると考えられる。

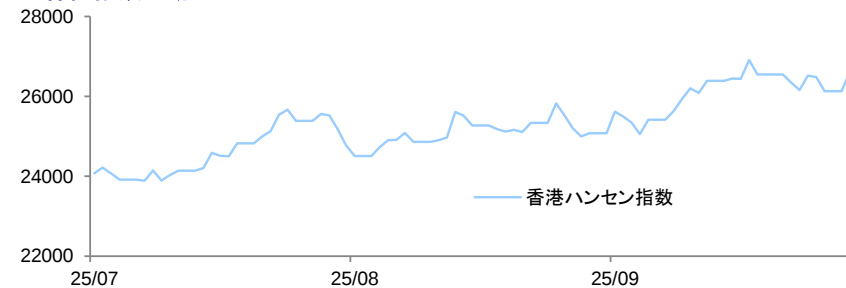
一方で、アグリゲートバランスが低位推移する中、香港ドル金利については上昇圧力がかかりやすいものと考えられる。その為、引き続き米ドルと香港ドルの金利差は縮小しやすく、米ドル/香港ドル相場はペッグ制レンジの下半分で上値重く推移する展開となるであろう。

尚、ドルの下落が一段加速してHKMAによるペッグ制下限7.75に到達すれば、香港ドル売り介入が実施され、それによりアグリゲートバランスが増加、香港ドル金利は低下に転じることが想定される。こうした動きが見られれば、今度は逆に香港ドル金利の低下が香港ドル売りにつながり、5月から6月に見られたようなペッグ上限に向けた米ドル/香港ドルの上昇が見られることとなるであろう。

■ 為替の動き



■ 株価指数の動き



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/1	小売売上高(価額、前年比)	7月	-	1.8%	0.7%
9/3	S&P Global Hong Kong PMI	8月	-	50.7	49.2
9/5	外貨準備高	8月	-	\$421.6b	\$425.4b
9/16	失業率(季調済)	8月	-	3.7%	3.7%
9/22	CPIコンポジット(前年比)	8月	-	1.1%	1.0%
9/25	輸出(前年比)	8月	-	14.5%	14.3%
9/25	輸入(前年比)	8月	-	11.5%	16.5%

■ 今月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想
10/2	小売売上高(価額、前年比)	8月	-
10/6	S&P Global Hong Kong PMI	9月	-
10/8	外貨準備高	9月	-
10/20	失業率(季調済)	9月	-
10/23	CPIコンポジット(前年比)	9月	-
10/27	輸出(前年比)	9月	-
10/27	輸入(前年比)	9月	-

中国人民元相場

予想レンジ: USD/CNY 7.0500 ~ 7.1500
CNY/JPY 20.50 ~ 21.50

中国為替資金部 西谷 鷹

■ 先月の為替相場

9月のドル人民元(USDCNY)は月中に一時7.10台前半まで下落も、月末にかけては反発する展開。

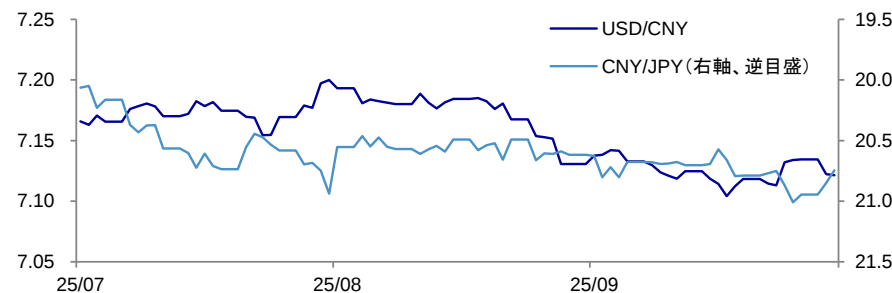
USDCNYは1日、7.1300でオープン。寄り付き直後、RatingDog中国PMI(旧財新PMI)が予想を上回ったことから元高へ推移し7.1270を付けたものの、材料消化後はドル買いが優勢となり2日には一時7.1500まで上昇。その後は7.13台まで値を下げて越週した。

翌8日は7.1300でオープン。PBOC基準値が連日年初来元高水準を更新したことや米金利低下の動きなどを背景に、USDCNYは下げ基調となり、11日には終値ベースで一時7.11台まで下落後、7.12台で越週した。

翌15日は7.1240でオープン。同日発表された中国8月主要経済指標は市場予想を下回る結果となったもののUSDCNYへの反応は限定的。17日の米FOMCで25bpの利下げ発表直後には7.10台前半まで下落し年初来元高水準を更新。その後はパウエル議長の「今回の利下げはリスク管理のための利下げ」等の発言を受けたドル買戻しの動きや、18日のPBOC基準値が7.1099と前日対比元安水準での設定となったことを受けて、USDCNYも反転上昇し、7.11台で越週した。

翌22日は7.1158でオープン。24日、米金利上昇を背景に終日を通し主要通貨に対してドル買いが進みUSDCNYも7.11台から7.13台へ上昇。同水準を維持して越週した。

■ 為替の動き



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/31	製造業PMI	8月	49.5	49.4	49.3
9/8	貿易収支	8月	\$99.45b	\$102.33b	\$98.14b
9/10	CPI(前年比)	8月	-0.2%	-0.4%	0.0%
9/15	小売売上高(前年比)	8月	3.8%	3.4%	3.7%
9/15	鉱工業生産(前年比)	8月	5.6%	5.2%	5.7%
9/15	都市部固定資産投資(年初来前年比)	8月	1.50%	0.50%	1.60%

■ 今月の見通し

10月のUSDCNYは引き続き上値の重い推移が継続することを予想。

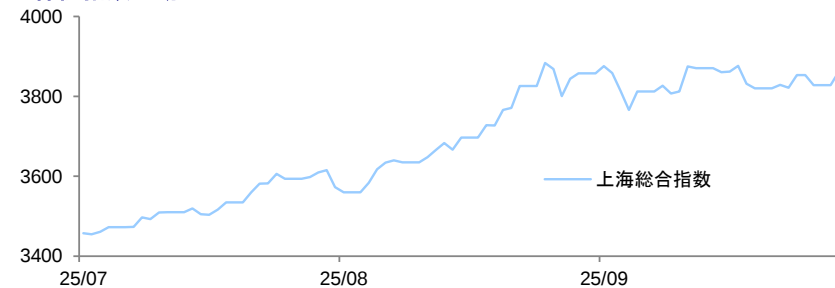
米中関税交渉は8月に追加関税一時停止措置の3か月間延長が発表されて以降、小康状態が継続。足元はベッセント米財務長官より次回交渉期限である11月10日に向けて、フランクフルトで米中閣僚級協議を実施との報道が見られたものの、具体的な中身の言及なく、依然として関税関連のヘッドラインでUSDCNYが双方向に変動するリスクには警戒しておきたい。

米国の金融政策に目を向けると、9月米FOMCで0.25%ptの利下げが実施され、同時に発表された政策金利見通し(ドット・チャート)では年内更に2回の利下げ予測が示された。今後の経済データ次第ではあるものの、10月FOMCにて1回利下げ、更に12月に1回利下げがマーケット内で織り込まれつつある中、ドル売り優勢の時間帯が多くなる可能性が高い。

一方、中国サイドでは、直近の国内主要経済指標に減速感が見られる中、10月に発表予定の第3四半期GDPの結果に注目が集まる。結果次第では、追加的な金融緩和策が意識される可能性もあり、動向には警戒しておきたい。

前述を鑑みると、米中いずれも緩和的な金融政策を実施する中で、米国の追加利下げがより意識され、米中金利差縮小に伴うUSD安CNY高の展開を予想する。

■ 株価指数の動き



■ 今月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想
9/30	製造業PMI	6月	-
10/13	貿易収支	6月	-
10/20	GDP(前年比)	6月	-
10/20	小売売上高(前年比)	2Q	-
10/20	鉱工業生産(前年比)	6月	-
10/20	都市部固定資産投資(年初来前年比)	-	-

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.2800 ~ 1.3050
SGD/JPY 112.50 ~ 116.50

アジア・オセアニア資金部 清田 歩

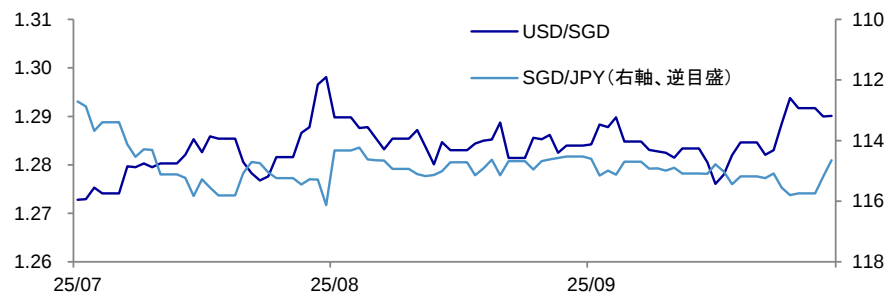
■ 先月の為替相場

9月のUSD/SGDは月半ばにかけ下落も、FOMC通過後は上昇に転じ往って来い月初、1.28台前半から取引を開始、米金利の上昇等にけん引され1.29台に浮上。4日米国時間から5日にかけては、弱い米雇用関連指標が立て続けに確認されUSD売り地合いとなり、USD/SGDは9日までに一時1.28割れの水準まで値を下げた。尚、5日に発表された星7月小売販売指数は今年1月ぶりとなる高水準(4.8%)を付けるも、市場の反応は限定的となった。

11日、米8月CPIは予想対比強含む結果となったが、同日公表された米インシャルクレームが弱含んだことでオフセットされ、1.28台前半でのレンジ推移に終始。月半ばに控えるFOMCに向けドル買いが徐々に手控えられる中、ハト派で知られるマイラン氏のFRB理事承認等を背景にドル売り地合いへ。USD/SGDは下げが加速し、一時1.27台半ばへ下落。17日、迎えたFOMCでの発表直後では一時1.27台前半まで売られるも一瞬に終わり、FOMC通過後は反転ドル買いが進行。同週末までに、USD/SGDは1.28台半ばまで買い戻される展開となった。

23日公表された星8月CPI総合・コア共に予想以上の減速を見せ、共にコロナ禍以降の最低値を更新も、為替相場への影響は限定的。24日、アジア時間からUSD買い地合いの流れが続くと、米国時間には米金利上昇の流れも重なりUSD/SGDは最大1.29手前へ上昇。25日米国時間、米Q2GDPや米個人消費、労働関連指標が予想対比続けて強い数字となったことが確認されるとUSD買いが一段と加速、今年7月末以来の水準となる1.29台前半へと上伸した。

■ 為替の動き



■ 先月の注目イベント

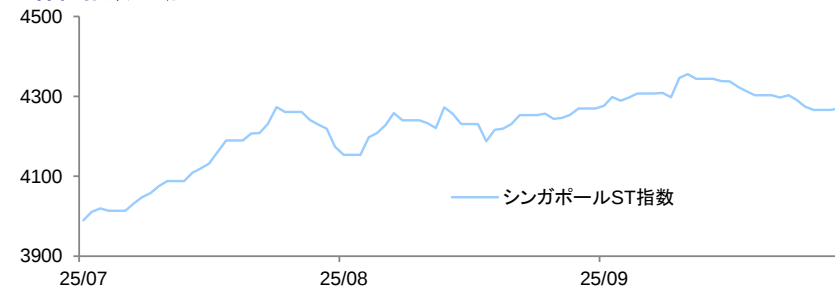
発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/2	PMI	8月	-	50.0	49.9
9/5	小売売上高(前年比)	7月	2.1%	4.8%	2.4%
9/17	非石油輸出(前年比)	8月	0.8%	-11.3%	-4.7%
9/23	CPI(前年比)	8月	0.6%	0.5%	0.6%
9/26	鉱工業生産(前年比)	8月	-1.9%	-7.8%	7.7%

■ 今月の見通し

10月のUSD/SGDは年内の利下げ回数に関する議論を横目に、上昇する展開を予想9月のUSD/SGDはFOMCに向け下落も、堅調な米経済指標が続くなかUSD買いが進み、1.29台前半を回復。同水準は、欧米間での関税合意等が集中した7月末以来のレベル感。8月初旬に米労働市場の大幅減速が確認されて以降9月下旬に掛けて1.28台を行き来する方向感に欠ける推移が継続していた中で、徐々にレンジをブレイクする動きとなっている。

1.30台に向け一段の上昇があるとすれば、米労働関連指標次第というところだろう。直近発表された米Q2GDPや個人消費等につき、米経済のレジリエンスを示す各種経済指標が継続して確認されるか注目。尚、シンガポール国内では、一貫したCPIの減速等を背景にSGD金利の低下が継続。これだけを切り取るとSGD売りを連想させる動きだが、これまでのところUSD/SGD相場への影響は限定的。つまるところ、同相場動向は引き続き米国に振られるところが大きく、シンガポール関連のイベントに対してはかなり限定的な反応に留まることが予想される。ちなみに次月10月は年内最後のMAS政策決定会合が予定されているが、足元までのCPI(含むコア)の顕著な減速は、2会合ぶりとなる政策バンドの傾き縮小(緩和化)のサポート材料になると予想されている。MASが緩和に踏み切る場合、USD/SGD相場では上昇材料として捉えられるだろう。

■ 株価指数の動き



■ 今月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想
10/3	小売売上高(前年比)	8月	5.1%
10/1-14	MAS金融政策決定会合	-	-
10/10-14	GDP(速報)	3Q	-
10/17	非石油輸出(前年比)	9月	追加緩和
10/23	CPI(前年比)	9月	-

タイバーツ相場

予想レンジ: USD/THB 31.50 ~ 32.60
THB/JPY 4.50 ~ 4.70

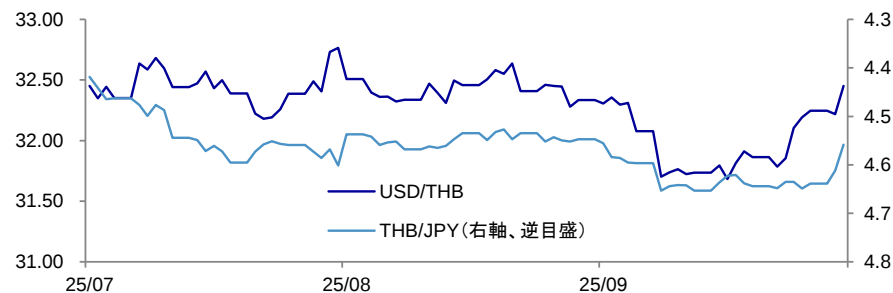
アジア・オセアニア資金部バンコック室 岡崎 玲奈

■ 先月の為替相場

9月のドルバーツは、一時31.50バーツ台の安値を付けるも、FOMCでの利下げが確認されて以降、月末にかけて徐々にドルが買い戻され、月初の32バーツ台を回復する「行ってこい」の展開となった。

月初は32.30バーツ台前半で取引開始。タイ次期首相を巡る政局不安が続く中ではあるも、バーツ売りは限定的となり、むしろ3日に米雇用関連の弱いデータが発表されたことで米雇用統計の下振れリスクが意識され、ドル安が進行する展開に。5日、アヌティン氏がタイ新首相に選出されたが、為替市場で特段の反応はなし。同日発表の米8月雇用統計が市場予想を大幅に下回ると、一気に32バーツ手前まで下落。週明け8日には金価格の上昇や米金利低下により、さらにバーツ高が進行。9日には31.50バーツ台後半の2021年2月以来の安値を付けた。以降は、17日に控えるFOMCでの利下げが確実視される中で、31.60バーツ台前半から31.70バーツ台後半の狭いレンジで上値重く推移。15日には『タイ当局がバーツ高抑制のため金取引への課税を検討』とのヘッドラインで31.90バーツ台前半までバーツ売りが進んだが、その後は再びドル売り圧力に押され31.60バーツ台半ばまで下落。17日、FOMCにて25bpの利下げが決定されるも、会合後のパウエル議長の会見内容を受けて年内の大幅利下げ観測が後退し、米金利上昇に伴いドルが買い戻され、18日には31.90バーツ台前半まで回復。週明け22日にはタイ新政権による政策発表予定などが報道されたが、為替市場の反応は限定的となり、31.80バーツ台での推移が続くも、24日には米ドル建ての大型社債発行なども支援材料となり、ドル高が一段と進み32.10バーツ台を付けた。

■ 為替の動き



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/4	CPI YoY	8月	-0.70%	-0.79%	-0.70%
9/4	CPIコアYoY	8月	0.78%	0.81%	0.84%
9/18-24	自動車販売台数	8月	-	47,622	49,102
9/18-26	輸出(通関ベース)YoY	8月	7.0%	5.8%	11.0%
9/18-26	輸入(通関ベース)YoY	8月	8.2%	15.8%	5.1%

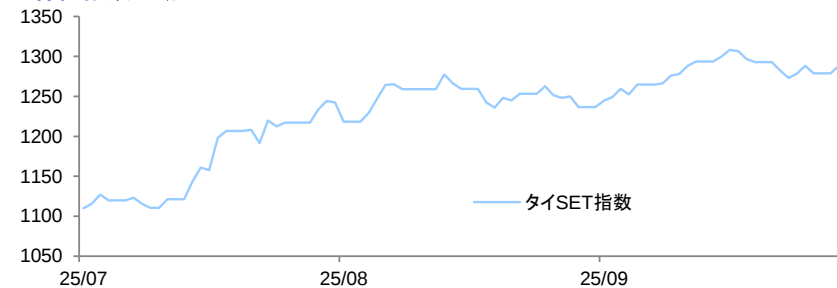
■ 今月の見通し

10月のドルバーツは、引き続き米国の金融政策動向に左右される展開が予想されるが、タイ固有の要因での上振れリスクにも留意したい。

9月FOMC後に公表されたドットチャートでは、年内利下げ回数の中央値が残り2回と示されたものの、その後の米国経済指標の強さを受けて、市場の利下げ織り込みはFOMC直後の2.3回から足元では1.5回程度まで後退し、米金利の上昇とともに9月末にかけてドルバーツも上昇した。さらに、米金利上昇の影響でバーツと相関が高いとされる金価格の上昇も一服し、これが9月後半のドルバーツ上昇を後押ししたと考えられる。直近のバーツ高の背景には国際金価格の上昇があるとの指摘があり、9月にはタイ中銀や政府から警戒感が示されているが、かかる中、10月初旬のアヌティン新内閣による政策発表以降、金取引に対する対策が打ち出される可能性が高いと見ており、その内容次第ではバーツ安が進行するリスクも想定される。また、タイの金融政策については、ハト派とされるヴィタイ新総裁の下で初となる10月の金融政策委員会を控えるが、足元市場の利下げ織り込みは完全に剥落している。この状況下で仮に10月に利下げが実施されれば市場にとってはサプライズとなり、こちらもドルバーツ上昇要因となり得る。

ドルバーツの方向性は米国の経済指標や金融政策次第ではあるが、タイ国内の金取引への対策の発表や中銀の金融政策次第では、変動が一段と増幅される可能性がある点に注意したい。

■ 株価指数の動き



■ 今月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想
10/6	CPI YoY	9月	-
10/6	CPIコアYoY	9月	-
10/8	タイ中央銀行指標金利	9月	-
10/18-24	自動車販売台数	9月	-
10/18-26	輸出(通関ベース)YoY	9月	-
10/18-26	輸入(通関ベース)YoY	9月	-
10/31	貿易収支	9月	-

マレーシアリング相場

予想レンジ: USD/MYR 4.1700 ~ 4.2600
MYR/JPY 34.50 ~ 35.90

マレーシアみずほ銀行 鈴木 一勲

■ 先月の為替相場

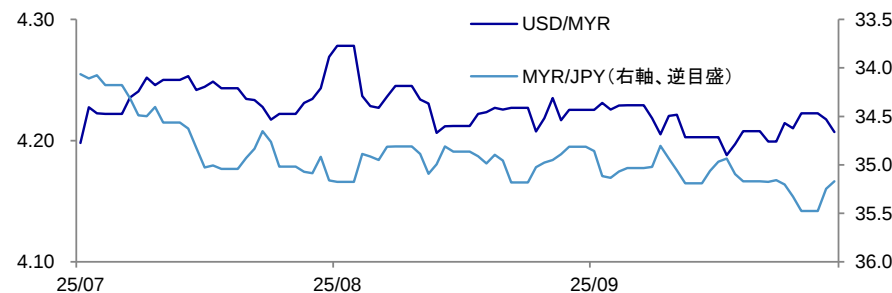
9月は約1年ぶりの対ドル高値を付けた。2日は4.21台後半で始まり、米金利上昇と共にドル買いが優勢。4.23台半ばを付けた後、弱めの米7月新規求人件数を受けて、4.22台前半に下落。馬中銀のMPCは市場の予想通りの据え置きで、相場への影響は小さく、4.23手前で馬休場中の米8月雇用統計を迎えた。同統計は市場予想に届かず、6月分がマイナスへ修正された他、長期失業率も悪化。FRB利下げへの思惑から9日には4.20台へ。ただ、米8月CPI等の発表前には4.21台に戻した。中旬、米8月CPIはほぼ予想通りで、米金利が一時低下したが、米半導体関連株の好決算を背景に米株が好調。相場は下値が堅く、4.20台前半で引けた。馬の連休中、ライオンCEA委員長がFRB理事に就任。米政権の意向が反映され、FRBの独立性が低下するとの懸念が高まり、17日には約1年ぶりドル安水準となる4.18台半ば示現。FOMCでは25bpの利下げが決定されるも、比較的FRBメンバーの金利予想がタカ派だったという捉え方から、週末にかけて4.21台までドルが買い戻された。

22日は前週末の米株市場の好況を受け、朝方の4.20台水準から4.21台へ上昇するも、新任のFRBマイラン理事がインタビューにて大幅利下げを主張。結果、ドル安が優勢で4.20を一時割り込んだが、FRB内では意見の相違があることも判明しており、更なるドル安とはならず。第4週後半にかけて住宅系指標やGDP等の予想比強い米経済指標が続き、新たな米関税策発表も重しになって26日には4.22台前半と約3週間ぶりのドル高・リング安水準へ上昇した。

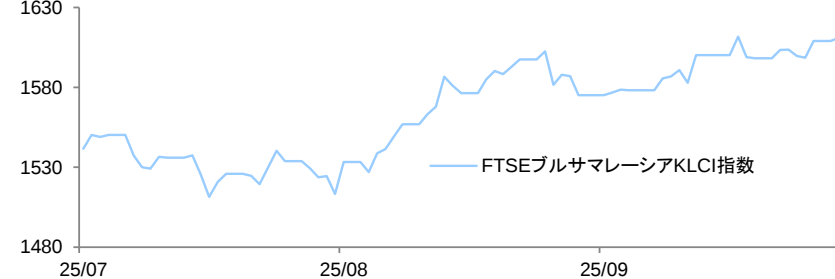
■ 今月の見通し

10月のリング相場は2026年の馬政府予算案発表をこなしつつ、対ドルで堅調に推移すると予想。今月は馬の年間を通じた国内イベントの内、最も注目度が高い2026年の政府予算案発表が控えている。基本的には、財政改善を進めつつも、予算執行対象の「選択と集中」により国民生活の質の向上、馬の国際競争力向上がメインに置かれることから、リング相場にとってネガティブな要因にはならないと考えるが、財政改善を掲げて昨年発表された売上・サービス税対象拡大の遅延や、ガソリン補助金の縮小開始遅延等もあり、当初想定していたタイムライン比では、財政改善が進んでいない。また、米の関税政策の影響により対米輸出が伸び悩む可能性がある他、対中輸出も中国の自立自強政策で鈍化する可能性があり、予算案が財政規律重視となると实体经济への負荷が高まる恐れから、若干リングにとってネガティブな要因になるかもしれないと考えている。一方、米ドル側の要因として、FRBメンバーの予想中央値で年内残り2回のFOMC全てで利下げを予想しているが、FOMC後のパウエル議長をはじめとするメンバーのコメントは一致しておらず、中々予想しにくい。それでも、米雇用市場は明確に減速していることが確認されているため、米馬間の金利差縮小及び馬政府の経済政策に基づく成長ペースこそ昨年比で減速しながらも、着実な成長が見込めるとして、10月のリングは対ドルで底堅く推移するというのが基本シナリオになると予想する。

■ 為替の動き



■ 株価指数の動き



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/2	S&P Global Malaysia PMI	Aug	-	49.7	49.7
9/4	BNM Overnight Policy Rate		2.75%	2.75%	2.75%
9/11	Industrial Production YoY	Jul	2.8%	4.2%	2.9%
9/19	Exports YoY	Aug	3.0%	1.9%	6.5%
9/19	Imports YoY	Aug	-0.4%	-5.9%	0.6%
9/19	Trade Balance MYR	Aug	11.3B	16.13B	14.61B
9/23	CPI YoY	Aug	1.3%	1.3%	1.2%

■ 今月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想
10/1	S&P Global Malaysia PMI	Sep	-
10/10	Industrial Production YoY	Aug	-
10/17	GDP YoY	3Q速報	-
10/17	Exports YoY	Sep	-
10/17	Imports YoY	Sep	-
10/17	Trade Balance MYR	Sep	-
10/22	CPI YoY	Sep	-

インドネシアルピア相場

予想レンジ: USD/IDR 16400 ~ 16800
IDR/JPY 0.8700 ~ 0.9100

(注)100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 穴吹 太郎

■ 先月の為替相場

先月のドルルピアは上昇。

月初のドルルピアは16,400台後半で始まり、先月末からのデモ拡大による長期不安定化懸念でルピア売りが進み、一時16,500台まで上昇。その後、中銀介入により2日には16,300台後半まで下落したのちは、祝日や米雇用統計を控え様子見ムードが広がり、相場は16,400台前半までドルが買い戻された。8日は米雇用統計を受けて米利下げ観測が強まり16,300台前半まで下落。しかし、インドネシアのスリ・ムルヤニ財務相の解任報道で翌日には16,500手前まで急上昇。その後、中銀の市場安定介入や新財務相による財政赤字の上限維持表明で相場は落ち着きを取り戻し、12日には財務省が国営銀行を通じた資金注入を公表したことで16,300台後半まで下落した。

15～16日はインドネシア中央銀行の独立性に関する懸念からルピア売りが優勢となり16,400台半ばまで上昇。17日には中銀が政策金利である7日物リバースレポ金利を25bp引き下げたことでルピア安・ドル高が進行。18日には米国の利下げ後のパウエル議長発言を受けてドル買いが優勢となり、一時16,500台前半まで上昇。22日は中銀総裁によるルピア預金金利引き下げや政府の経済政策・財政赤字拡大懸念から、ドルルピアは16,600台半ばまで上昇。23日は2026年予算案で財政悪化懸念が広がり月末にかけてはルピア売りが優勢。一時4月下旬以来の安値である16,800まで上昇。中銀総裁の通貨安定発言でやや上値は重くなったものの、全体としてルピア安・ドル高基調が継続した。

■ 今月の見通し

今月のドルルピアはルピア安地合いを想定。

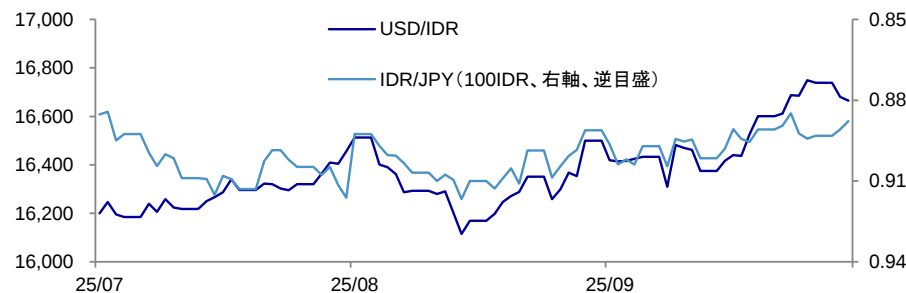
先月開催された金融政策会合においてインドネシア銀行(BI)は、政策金利(BIレート)を0.25%引き下げ4.75%とし、3会合連続の利下げを決定。市場の大半は据え置きを予想していたため、今回もサプライズとなった。会見では今回の利下げについて、IDRの安定性の維持やインフレ情勢への言及があったほか、経済成長への支援の必要性がより強調されたものとなり、今後も追加利下げの可能性が示唆された内容となった。引き続きトレンドとしては金利低下を見込む。

また8月末に起こった反政府デモや9月に起こったムルヤニ財務相の解任騒動、インドネシア中銀の独立性が問われる報道、財政赤字や財政規律への不透明感が高まっている環境を踏まえるとルピアは売られやすく、ドル高ルピア安が進むことをメインシナリオと考えたい。

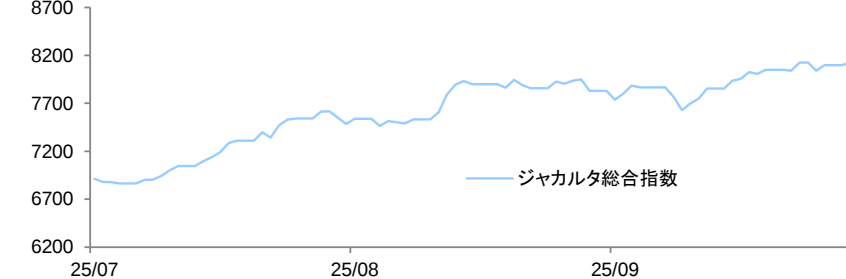
米国の動向については9月のFOMC後、パウエル議長の会見によって追加の利下げについてけん制される格好となった。2025年末まで2回の利下げをマーケットは折り込んでいる環境ではあるが、経済指標によっては織り込みが剥落する可能性はあり、金利面においても相対的にルピア安が進みやすい環境が続くと考えられる。

一方で、さらなる安値を試すような場面においてはインドネシア中銀からの介入が入ることが予想され、一定の歯止めがかかると推測される。以上からドル高ルピア安地合いは継続しつつも上値は押さえられると予想する。

■ 為替の動き



■ 株価指数の動き



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/1	CPI(前年同月比)	8月	2.49%	2.31%	2.37%
9/1	貿易収支(USD M)	7月	3,000	4,174	4,104
9/1	輸出(前年比)	7月	5.20%	9.86%	11.29%
9/1	輸入(前年比)	7月	-5.00%	-5.86%	4.28%
9/17	BI金利		5.00%	4.75%	5.00%

■ 今月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想
10/1	CPI(前年同月比)	9月	2.50%
10/1	貿易収支(USD M)	8月	3,847
10/1	輸出(前年比)	8月	3.00%
10/1	輸入(前年比)	8月	1.45%
10/22	BI金利		-

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 56.50 ~ 58.50
JPY/PHP 0.380 ~ 0.400

アジア・オセアニア資金部 マニラ室 福田 俊輔

■ 先月の為替相場

【9月は月末にかけて約2か月ぶりの58ペソ台までペソ安が進む展開】

9月初は、1米ドル＝57.122ペソで開始。9月初旬は一時57ペソ台半ばまで上伸する場面も見られたが、その後は反転。比8月CPI(前年比)が予想+1.2%、前回+0.9%に対して+1.5%と5か月振りの高水準となった事や米8月雇用統計が予想外に軟調な結果だった事を受け、下値を探る展開となり、56ペソ台半ば近くまで下落。

9月中旬になると、57ペソ丁度近辺まで値を戻したが、米FOMC待ちの様相となりレンジ相場が続いた。その後、大方の市場参加者の予想通り、米政策金利は0.25%の利下げが決定され、ドットチャートやパウエルFRB議長の会見をこなしながら、米長期金利が上昇する展開。ドルペソ相場は、ドル買い優勢となり徐々にペソ安方向へ。

9月下旬に差し掛かると、ここしばらく抵抗線となっていた57ペソ台半ばを上抜けると、8月初旬以来となる58ペソ台まで上伸。一時、58.43までペソ安が進んだが、相次ぐ台風襲来やそれに伴うペソ為替市場の取引時間の短縮などから、ペソ買い圧力が高まり、58ペソ丁度近辺で推移。9月終盤にかけても、58ペソ丁度を挟む水準で推移する展開となった。

■ 今月の見通し

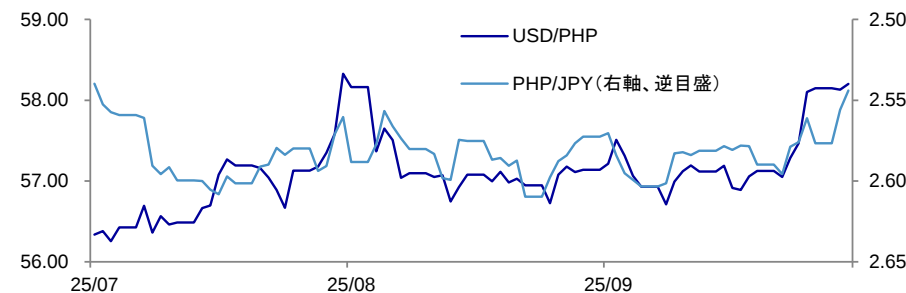
【10月は引続き荒っぽい値動きとなる可能性】

比中銀は、2025年内に少なくとも、あと1回の利下げを示唆しているが、残される金融政策決定会合は10月9日と12月11日のみ。これまでの所、比中銀からは明確なメッセージが無く、目先手がかりになるのは、10月7日に公表予定の比9月物価統計となる。また、米国の政策金利動向についても、過日、2025年内にあと2回の利下げが示唆されたが、米Q2GDPが予想よりも良好だったことを受け、市場参加者の間では、年内1回なのか2回なのかと幾分迷いが生じ始めている。次回FOMCは10月29日となるが、直近2回とも予想外に軟調な結果となった米9月雇用統計の結果に注目が集まる。

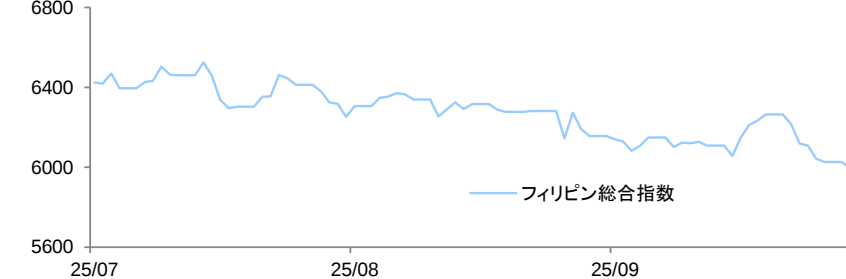
今後の比米金融政策の見通しについて、市場参加者の思惑がブレやすい環境下、経済指標結果や中銀アクションに対して神経質な値動きとなるだろう。

ペソ安方向については、過去何度も58ペソ台半ば以降は値動きが鈍くなることを繰り返しており、今回も相応に上値は重たくなる事を予想する。一方、7月以降、56～58ペソ台のワイドなレンジを何度も往来している中、一度走り出すと値動きの早い展開となり易いため、57ペソ台前半まで値を戻すことも想定しておきたい。

■ 為替の動き



■ 株価指数の動き



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/5	CPI(前年比)	8月	1.20%	1.50%	0.90%
9/15	在外フィリピン人労働者送金額(前年比)	7月	3.20%	3.00%	3.70%
9/30	貿易収支(100万ドル)	8月	-3,950	-	-4,050

■ 今月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想
10/7	CPI(前年比)	9月	-
10/9	BSP翌日物借入金利(政策金利)	-	-
10/15	在外フィリピン人労働者送金額(前年比)	8月	-
10/30	貿易収支(101万ドル)	9月	-

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 87.00 ~ 89.50
INR/JPY 1.55 ~ 1.75

アジア・オセアニア資金部 インド室 木原 志乃

■ 先月の為替相場

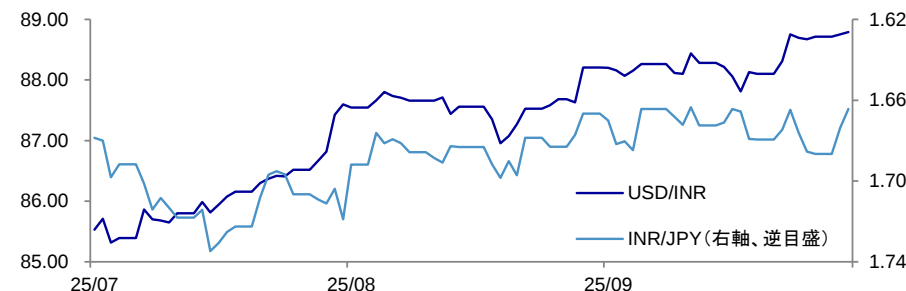
【9月の米ドル/インドルピーは、再び史上最安値を記録】

88台前半水準にて当月取引を開始。月初は、安値圏での揉み合いに終始した後、月央にはUSD売り圧力に連れられる恰好で、一時的に88水準を割り込むルピー高の局面を見せる。月末にかけては、米国から就労ビザH1-Bの発給厳格化が発表されると、ネガティブインパクトとなり、史上最安値を更新する展開に。一方、RBIからの上値抑えの為替介入にて値動きは抑制されつつ、上値の重い値動きに転じ、結局88台後半水準にてクローズ(29日時点)。

SENSEXは、80,000台前半水準で開始後、月初から上昇基調となり、月央には83,000水準を超える展開。その後、利益確定と思しき動きや、就労ビザ関連のヘッドラインを受けて下落に転じ、月初同水準まで値を下げるも、80,000台を割り込む程の勢いには至らずに、底堅く推移した(29日時点)。外国人投資家からのインド株への投資資金流入は、9月単月では売り越し優勢となり、資金流出動向に歯止めがかかるか注目。

インド経済指標では、2025年4～6月期の経常収支は頼みのサービス収支黒字の伸びが鈍化し、約▲24億ドルの赤字となり、前四半期は1年ぶりの黒字であったものの、赤字体質の抜本的改善にはしばし時間がかかる見込み。

■ 為替の動き



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/1	経常収支(十億ドル)	1Q	-	-2.4	13.5
9/1	製造業PMI	8月	-	59.3	59.1
9/3	サービス業PMI	8月	-	62.9	60.5
9/12	CPI	8月	2.11%	2.07%	1.61%
9/15	貿易収支(百万ドル)	8月	-24,815	-26,487	-27,350
9/26	鉱工業生産	8月	5.10%	4.00%	4.30%

■ 今月の見通し

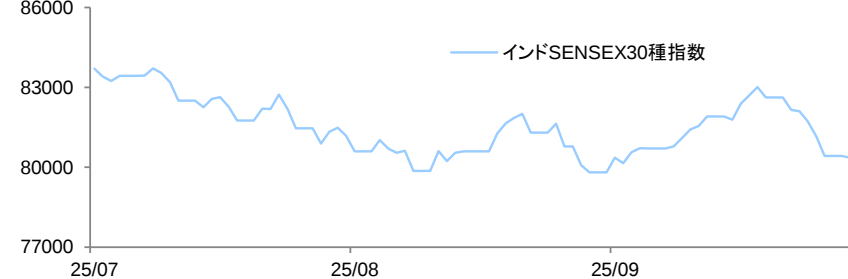
【10月の米ドル/インドルピーは、引き続きルピー安地合いか】

9月においては、史上最安値を更新する展開となるも、RBIからの為替介入にて一旦は平準化された恰好。就労ビザ関連のヘッドラインで、H1-Bビザ保有の7割はIT高度人材を中心としたインド人材であることから、先行き警戒感が高まることで、短期的にルピー売り圧力が進展していく可能性も。

10月の金融政策委員会(MPC)における政策金利は、5.50%の据え置きを予想。政策スタンスは中立スタンスを維持しており、デフインフレが進展後、直近の消費者物価指数(CPI)はインフレ再加速の兆候を見せ始めており、利下げ余地は限定されていく方向感で構えておきたい。

RBIの為替柔軟姿勢で従来対比では為替変動幅は大きく、ボラティリティは高い状況は変わっていない。10月は、ヒンドゥー教の最大の祭典「ディワリ」があり、例年ギフトなどの消費行動が活発になる。9月後半に施行された物品・サービス税(GST)改革も追い風となり、内需拡大によるインド景況感の更なる改善が好感されることで、上値の重い値動きも想定される。一方、輸出促進の観点から、大きなダイレクション変化とまでは至らず、総じて安値圏での推移となる見込み。

■ 株価指数の動き



■ 今月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想
10/1	政策金利		5.50%
10/1	製造業PMI	9月	-
10/6	サービス業PMI	9月	-
10/13	CPI	9月	-
10/15	貿易収支(百万ドル)	9月	-
10/28	鉱工業生産	9月	-

■ 為替市場見通し(四半期末の予想レベル)

	2025年 10～12月期	2026年 1～3月期	4～6月期	7～9月期	10～12月期
先進国					
USD/JPY	147	145	147	149	150
EUR/JPY	173	173	172	173	173
GBP/USD	1.33	1.35	1.35	1.36	1.36
AUD/USD	0.66	0.67	0.68	0.69	0.70
USD/CAD	1.37	1.36	1.36	1.35	1.34
エマージング					
USD/KRW	1390	1370	1350	1340	1330
USD/TWD	30.00	29.70	29.30	29.00	29.00
USD/HKD	7.78	7.78	7.77	7.76	7.76
USD/CNY	7.18	7.14	7.11	7.08	7.05
USD/SGD	1.31	1.30	1.29	1.28	1.28
USD/THB	33.00	32.80	32.50	32.30	32.00
USD/MYR	4.26	4.14	4.07	4.06	4.06
USD/IDR	17000	16560	16450	16500	16550
USD/PHP	56.10	55.20	54.40	54.40	54.40
USD/INR	85.80	86.30	85.50	85.80	85.30

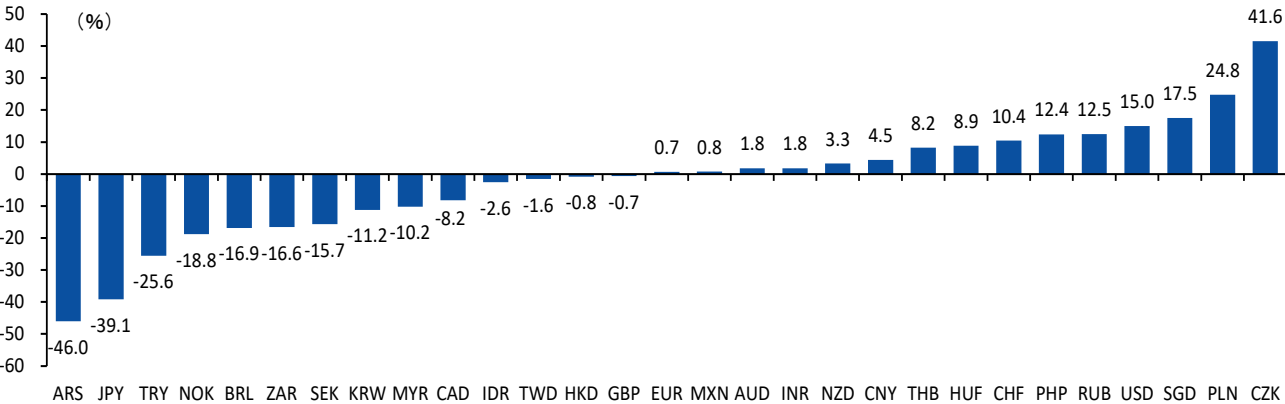
GBP/USD、AUD/USD、USD/CADを除く通貨は中期為替見通し、エマージングマーケットマンスリーに基づく見通しです。

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2024年末	2025年9月末	騰落率	株式市場	2024年末	2025年9月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	42544.22	46397.89	9.1%	-
日本	USD/JPY	157.2	147.9	-5.9%	日経平均株価	39894.54	44932.63	12.6%	19.7%
ユーロ圏	EUR/USD	1.0354	1.1734	13.3%	ドイツDAX指数	19909.14	23880.72	19.9%	19.9%
英国	GBP/USD	1.2516	1.3446	7.4%	ロンドンFTSE100指数	8173.02	9350.43	14.4%	6.5%
豪州	AUD/USD	0.6188	0.6613	6.9%	S&P/ASX200指数	8159.143	8848.774	8.5%	1.5%
カナダ	USD/CAD	1.4384	1.392	-3.2%	S&PTロント総合指数	24727.94	30022.81	21.4%	25.5%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	7.2993	7.1214	-2.4%	上海総合	3351.763	3882.777	15.8%	18.7%
香港	USD/HKD	7.7686	7.7827	0.2%	香港ハンセン	20059.95	26855.56	33.9%	33.6%
インド	USD/INR	85.6125	88.7912	3.7%	インドSENSEX30種	78139.01	80267.62	2.7%	-1.0%
インドネシア	USD/IDR	16132	16665	3.3%	ジャカルタ総合	7079.905	8061.062	13.9%	10.2%
韓国	USD/KRW	1478.6	1404.05	-5.0%	韓国総合株価	2399.49	3424.6	42.7%	50.3%
マレーシア	USD/MYR	4.4718	4.207	-5.9%	ブルサマレーシアKLCI	1642.33	1611.88	-1.9%	4.3%
フィリピン	USD/PHP	57.979	58.2	0.4%	フィリピン総合	6528.79	5953.46	-8.8%	-9.2%
シンガポール	USD/SGD	1.3657	1.2901	-5.5%	シンガポールST	3787.6	4300.16	13.5%	20.2%
台湾	USD/TWD	32.792	30.464	-7.1%	台湾加権	23035.1	25820.54	12.1%	20.7%
タイ	USD/THB	34.351	32.45	-5.5%	タイSET	1400.21	1274.17	-9.0%	-3.7%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2025年9月時点)



■ 実質GDP成長率

	2023Q4	2024Q1	2024Q2	2024Q3	2024Q4	2025Q1	2025Q2	2023	2024
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	3.4	0.8	3.6	3.3	1.9	-0.6	3.8	2.9	2.8
日本*	-0.5	-0.9	1.9	2.3	2.1	0.3	2.2	1.2	0.1
ユーロ圏	0.2	0.5	0.5	0.9	1.3	1.6	1.5	0.4	0.9
英国	-0.5	0.3	0.9	1.4	1.9	1.7	1.4	0.3	1.1
豪州	1.5	1.2	0.9	0.8	1.3	1.4	1.8	2.1	1.1
カナダ*	0.7	2.2	2.6	2.4	2.1	2.0	-1.6	1.5	1.6
エマーGINGアジア									
中国	5.3	5.3	4.7	4.6	5.4	5.4	5.2	5.4	5.0
香港	4.3	2.8	3.0	1.9	2.5	3.0	3.1	3.2	2.5
インド	9.5	8.4	6.5	5.6	6.4	7.4	7.8	7.6	9.2
インドネシア	5.0	5.1	5.1	5.0	5.0	4.9	5.1	5.1	5.0
韓国	2.2	3.4	2.2	1.4	1.1	0.0	0.6	1.4	2.2
マレーシア	2.8	4.2	5.9	5.4	4.9	4.4	4.4	3.6	5.1
フィリピン	5.5	5.9	6.5	5.2	5.3	5.4	5.5	5.5	5.7
シンガポール	3.1	3.2	3.4	5.7	5.0	4.1	4.4	1.8	4.3
台湾	4.7	6.6	4.9	4.2	3.8	5.5	8.0	1.1	4.8
タイ	1.8	1.7	2.3	3.0	3.3	3.2	2.8	2.0	2.5

(注)インドの年間成長率は会計年度(4~3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	24/12	25/01	25/02	25/03	25/04	25/05	25/06	25/07	25/08	2023	2024
	(%)									(%)	
先進国											
米国	4.1	4.0	4.1	4.2	4.2	4.2	4.1	4.2	4.3	3.6	4.0
日本	2.5	2.5	2.4	2.5	2.5	2.5	2.5	2.3		2.6	2.5
ユーロ圏	6.3	6.3	6.3	6.4	6.3	6.4	6.3	6.2		6.6	6.4
英国	4.4	4.4	4.4	4.5	4.6	4.7	4.7	4.7		4.1	4.3
豪州	4.0	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.3	4.2	4.2	3.7	4.0
カナダ	6.7	6.6	6.6	6.7	6.9	7.0	6.9	6.9	7.1	5.4	6.4
エマーGINGアジア											
中国											
香港	3.1	3.1	3.2	3.2	3.4	3.5	3.5	3.7	3.7	3.0	3.0
インドネシア			4.8							5.4	4.9
韓国	3.7	2.9	2.7	2.9	2.7	2.7	2.6	2.5	2.6	2.7	2.8
マレーシア	3.1	3.1	3.1	3.1	3.0	3.0	3.0	3.0		3.4	3.3
フィリピン	3.1	4.3	3.8	3.9	4.1	3.9	3.7	5.3		4.4	3.8
シンガポール	1.9			2.0			2.0			1.9	2.0
台湾	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.3	3.3	3.3	3.4	3.5	3.4
タイ	0.9			0.9			0.9			1.0	1.0

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	24/12	25/01	25/02	25/03	25/04	25/05	25/06	25/07	25/08	2023	2024
	(前年比%)									(前年比%)	
先進国											
米国	2.9	3.0	2.8	2.4	2.3	2.4	2.7	2.7	2.9	4.1	3.0
日本	3.6	4.0	3.7	3.6	3.6	3.5	3.3	3.1	2.7	3.3	2.7
ユーロ圏	2.4	2.5	2.3	2.2	2.2	1.9	2.0	2.0	2.0	5.5	2.4
英国	2.5	3.0	2.8	2.6	3.5	3.4	3.6	3.8	3.8	7.3	2.5
豪州	2.4			2.4			2.1			5.6	3.2
カナダ	1.8	1.9	2.6	2.3	1.7	1.7	1.9	1.7	1.9	3.9	2.4
エマーGINGアジア											
中国	0.1	0.5	-0.7	-0.1	-0.1	-0.1	0.1	0.0	-0.4	0.2	0.2
香港	1.4	2.0	1.4	1.4	2.0	1.9	1.4	1.0	1.1	2.1	1.8
インド	5.2	4.3	3.6	3.3	3.2	2.8	2.1	1.6	2.1	5.7	5.0
インドネシア	1.6	0.8	-0.1	1.0	2.0	1.6	1.9	2.4	2.3	3.8	2.3
韓国	1.9	2.2	2.0	2.1	2.1	1.9	2.2	2.1	1.7	3.6	2.3
マレーシア	1.7	1.7	1.5	1.4	1.4	1.2	1.1	1.2	1.3	2.5	1.8
フィリピン	2.9	2.9	2.1	1.8	1.4	1.3	1.4	0.9	1.5	6.0	3.2
シンガポール	1.5	1.2	0.9	0.9	0.9	0.8	0.8	0.6	0.5	4.8	2.4
台湾	2.1	2.7	1.6	2.3	2.0	1.5	1.4	1.5	1.6	2.5	2.2
タイ	1.2	1.3	1.1	0.8	-0.2	-0.6	-0.3	-0.7	-0.8	1.3	0.4

(注)豪州は四半期データ。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2023Q4	2024Q1	2024Q2	2024Q3	2024Q4	2025Q1	2025Q2	2023	2024
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-3.3	-3.4	-3.5	-3.8	-4.0	-4.5	-4.4	-3.3	-4.1
日本	3.8	4.4	4.6	4.7	4.8	4.9	4.9	3.8	4.8
ユーロ圏	1.7	2.2	2.6	2.7	2.6	2.4	2.1	1.7	2.6
英国	-3.6	-3.4	-2.8	-2.6	-2.2	-2.3	-2.6	-3.6	-2.2
豪州	-0.3	-0.7	-1.2	-1.4	-1.9	-2.1	-2.1	-0.3	-1.9
カナダ	-0.6	-0.6	-0.5	-0.4	-0.5	-0.4	-0.9	-0.6	-0.5
エマーGINGアジア									
中国	1.5	1.3	1.3	1.7	2.3	2.9	3.2	1.4	
香港	8.5	10.1	11.9	12.0	12.9	13.8	13.5	8.5	12.9
インド	-0.9	-0.7	-0.7	-0.8	-0.8	-0.6	-0.4	-0.9	-0.8
インドネシア	-0.2	-0.6	-0.6	-0.6	-0.6	-0.5	-0.5	-0.2	-0.6
韓国	1.8	3.3	4.5	4.9	5.4	5.8	5.8	1.8	5.3
マレーシア	1.1	1.4	1.1	0.8	1.4	1.8	1.6	1.1	1.4
フィリピン	-2.9	-2.3	-2.6	-3.2	-4.0	-4.4	-4.0	-2.8	-4.0
シンガポール	17.7	17.5	17.3	17.4	17.5	17.7	18.0	17.7	17.5
台湾	14.0	15.1	14.7	14.3	14.2	14.0	14.8	14.0	14.2
タイ	1.7	1.8	2.3	2.0	2.2	3.4	3.6	1.7	2.2

(注)インドの年間経常収支は会計年度(4~3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在の水準(%)	政策転換期		直近の政策動向	
			日付	水準(%)	日付	決定事項
先進国						
米国	FFレート誘導目標	4.00-4.25	緩和: 2024/9/18	5.25-5.50	2025/9/17	-25bp
日本	当座預金残高の政策金利	0.50	引き締め: 2024/3/19	-0.10	2025/9/19	現状維持
ユーロ圏	預金ファシリティレート	2.00	緩和: 2024/6/6	4.00	2025/9/11	現状維持
英国	バンク・レート	4.00	緩和: 2024/8/1	5.25	2025/9/18	現状維持
豪州	キャッシュ・レート	3.60	緩和: 2025/2/18	4.35	2025/9/30	現状維持
カナダ	翌日物金利	2.50	緩和: 2024/6/5	5.00	2025/9/17	-25bp
エマージングアジア						
中国	1年物最優遇貸出金利(LPR)	3.00	緩和: 2012/6/8	6.31	2025/9/22	現状維持
インド	翌日物レポ金利	5.50	緩和: 2025/2/7	6.50	2025/8/6	現状維持
インドネシア	BI金利	4.75	緩和: 2024/9/18	6.25	2025/9/17	-25bp
韓国	7日物レポ金利	2.50	緩和: 2024/10/11	3.50	2025/8/28	現状維持
マレーシア	翌日物金利	2.75	緩和: 2025/7/9	3.00	2025/9/4	現状維持
フィリピン	翌日物金利	5.00	緩和: 2024/8/15	6.50	2026/8/28	-25bp
台湾	再割引金利(公定歩合)	2.000	引き締め: 2022/3/17	1.125	2024/12/19	現状維持
タイ	翌日物レポ金利	1.50	緩和: 2024/10/16	2.50	2025/8/13	-25bp
ベトナム	リファイナンス金利	5.00	緩和: 2023/3/31	6.00	2023/5/23	-50bp

(注) インドネシア中銀は2023年12月21日に政策金利を7日物リバースレポレートからBI金利に変更

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行